

第2回 西宮市緑の基本計画改定検討会 議事録(発言要旨)

■日 時：平成30年11月22日(木) 10:00～12:00

■場 所：西宮市役所 本庁舎2階 252会議室

■出席委員：平田座長、梶木副座長、栗本委員、栗野委員、長岡委員

■事務局：土木局長 他13名

■議 事：(1) 第1回 改定検討会におけるご意見について
(2) 西宮市緑の基本計画の全体フレームについて
① 西宮市緑の基本計画の全体フレームの検討案
② 計画のテーマ及び緑の現況の課題
(3) その他(アンケート調査の実施状況について)

■議 事 録：(「⇒」は意見・質問に対する回答又は関連する意見等を示す。)

(1) 第1回 改定検討会におけるご意見について

- ・ 特になし

(2) 西宮市緑の基本計画の全体フレームについて

① 西宮市緑の基本計画の全体フレームの検討案

- ・ 計画のサブテーマの6項目(①文教住宅都市の緑を未来に引き継ぎ、更に魅力を高めるまちづくり ②子どもの遊びと子育てを応援するまちづくり ③誰もが健康で心豊かに暮らせるまちづくり ④安全で安心して暮らせるまちづくり ⑤地域のきずなを強めるまちづくり ⑥自然環境と共生するまちづくり)自体は、西宮市のまちづくりの方向とほぼ一致し、齟齬は無いと考えられる。【委員】
- ・ 現況に対する課題について、各課題は相互に関係していると考えられる。サブテーマに対する現況と課題が明確に分断され過ぎていることから、課題の抽出も断片的になるおそれがある。【委員】
 - ⇒ 「計画のサブテーマ」の6項目から「テーマを実現するために必要な緑」の4項目(①自然環境 ②公園緑地 ③まちなかの緑化 ④市民と育む花と緑)に、急激に絞り込み過ぎているかも知れない。ある一つの課題が「テーマを実現するために必要な緑」の4項目のいずれかに限定的に対応するわけではないため、マトリックスで考えていくべき。【委員】
- ・ 「計画のサブテーマ」について、「②子どもの遊びと子育てを応援するまちづくり」との記載があるが、「応援する」という表現が市として一步引いた印象を受け、違和感を覚える。より積極的な書き振りが求められる。【委員】
 - ⇒ 表現については、積極的な姿勢を示すポジティブな表現を再検討する。【事務局】
 - ⇒ 本計画は、行政・一般市民・事業者など皆に関わる計画書となるため、こうしたそれぞれの主体を想定したときにどういう表現がよいのか、ということ意識した書き振りにする必要がある。【委員】

② 計画のテーマ及び緑の現況の課題

i 公園の新規整備について

- ・ 公園の数が足りていない地域があるということで、新たな公園を整備していく必要があると記載されているが、現実的に可能なのか。【委員】
 - ⇒西宮市の成り立ちからすると、南部の市街地は戦災復興の過程で公園整備が進んできたこ

とから、大きな公園は JR 以南に集中している。一方、JR 以北については、農地もたくさん残されていた。そのため、子どもが遊べるような公園は不足しているものの、オープンスペースとしての自然環境は確保されていた。その後、生産緑地法が成立し、一定継続して農地として確保されていたが、平成 34(2022)年に 30 年の期限を迎えることから、宅地化が懸念される。【事務局】

⇒ 「身近な公園の誘致距離 現況図」の公園が不足しているエリアは、「市街化区域内農地現況図」を見ると生産緑地地区の指定を受けているという関係になっている。方法としては、生産緑地地区の延長をするか、買取申出があったところを買って公園緑地にしていくということがある。ただ、農地だけではなく、社寺林等も含めて借地公園や市民緑地等として活用していく方向性もあると考えられる。新しい用地を用意することが難しい状況の中で、市内の公園の偏在を平準化していくことが必要であるが、都市内農地という資源もあるため、公園の新規整備も不可能ではないと考えられる。【委員】

ii 公園の再整備について

- ・新しい公園を整備していくことが現実的に難しい状況において、公園施設の老朽化対策といった内容が挙げられているが、そうした消極的な姿勢で臨むのではなく、もう一步進めて、公園施設を「リノベーション」することによって、まちの魅力向上に資する整備を行っていくという考え方も必要と考えられる。大阪の天王寺公園の「てんしば」や、東京の「南池袋公園」、福岡の「警固公園」のように、公園が犯罪等の温床になっていたところをリノベーションにより街の魅力の拠点にしていった事例もある。【委員】
- ・特に近年増加している街なかの園庭を持たない保育園等において、安全・安心して使用できるような公園施設の改修が求められる。【委員】
⇒ 「リニューアル」という言葉を使用しているが、指摘内容を踏まえ、「リノベーション」という表現で再検討する。【事務局】
- ・どこでも同じ公園をつくるのではなく、特徴を出してバラエティに富んだ公園をつくっていてもよいのではないか。多様な世代が集える公園もよいが、子育て世代や、中高生に特化した公園があってもよいのではないか。なお、課題の中では、中高生等の若年層への対応の視点が抜け落ちているのではないか。【委員】
- ・高齢化により管理ができないという理由で自宅の庭の植栽もなくしてしまうケースがある。こうした状況から、公園の樹木等の植栽を見直す中で、公園が地域の庭となるようなリニューアルを行ってもらいたい。近隣で憩える・癒されるような公園づくりを。【委員】
⇒ 樹木の伐採も含めて、近年見通しの良い公園が受け入れられている。公園が地域の庭となるようなリニューアルが必要で、同時に、地域住民の管理に携わる意識を醸成する取組が必要。【委員】
- ・最近の潮流として、ストライダー（幼児向けペダルなし二輪車）を楽しむための起伏のあるコースを父親が集まって作っている事例もある。また、中高生のスケートボード場をつくるといったようなこともあってもよいのではないか。こうした場づくりやルールづくりから若い方が参画するとよいのではないかと思う。公園をリノベーションするときの取り組み方として、子育て支援を行う部署などと連携して実施されるとよい。関わってもらいたい人たちを巻き込んでいく考え方が必要。市民力の向上にもつながる。【委員】

iii 西宮らしさについて

a) 環境学習の推進について

- ・ 計画のサブテーマに関して、西宮らしさが見えてこない。西宮市の特徴は、環境学習に関する取組が進んでいることではないか。循環型社会について学ぶことができ、歴史もあり、環境保全について意識の高い市民が育つ計画であると、緑の重要性の理解を促進し、都市のブランディングにもつながるのではないか。【委員】
 - ⇒ 環境学習を進めている基盤を記載し、さらにその機能を発揮させるためにどうしたらよいかという視点を盛り込めると、より良い計画となる。西宮の特徴を出し、かつ、それを伸ばしていこうとしていることがわかるようなものとすべき。【委員】
 - ⇒ 市では環境学習都市推進課が中心となり、新環境計画の見直しの中で、環境施策のキーは適切な学習が基盤になるという考え方を示しており、緑の基本計画も新環境計画とリンクしながら進める関係もあるため、環境学習は外してはならない視点である。【事務局】
 - ⇒ 計画のサブテーマの「自然環境と共生するまちづくり」といったタイトルについて、環境学習の視点を前面に押し出すように見直す。【事務局】
 - ⇒ 生涯学習等で環境に関心の高い方もおられ、子どもだけではなくことも含めて検討されたい。【委員】
- ・ 環境学習について、子どもだけではなく単身世帯等も含めた緑への意識付けについても考慮されたい。【委員】
 - ⇒ あらゆる世代を網羅した取組として、中学生以上の大人の世代については、「市民活動カード」を使った取組を推進している。この活動の中では、地域の公園の清掃活動等も、大人が参加する環境学習の一環として捉えている。こうした地域に根付いた環境活動は一歩進んでいるものと考えている。【事務局】
 - ⇒ 計画の中では、そうした取組と実施場所(拠点)とのリンクがなされるとよい。【委員】
- ・ 環境学習に関して、これからの時代は、アウトリーチ活動についても考えていく必要がある。遠くの拠点施設に出向かなくても、近所の公園に環境学習の場がやってくるといった取組をされているかと思うので、更に推進できるとよい。【委員】
- ・ 西宮市が推進する緑化活動や環境保全に係る取組は、子ども・子育て世代、高齢者世代については施策的にも取り組み、多くの参加もいただいているが、その真ん中の就労世代が抜けており、こうした世代に向けた施策も必要と感じている。【事務局】
- ・ 近年、公園の賑わいづくりの現場では、キッチンカーがよく使われている。こうしたものの環境学習版ができると良いのではないか。【委員】

b) その他の魅力について

- ・ 西宮の魅力としては、西宮神社や広田神社の社寺仏閣、大学のキャンパス、酒蔵などもあり、こうした歴史的資源を含め、民有地であっても西宮のイメージを形成している緑を図面に落としがいけるとよいのではないか。【委員】
 - ⇒ “緑が多い”という西宮の魅力を踏まえた上で、まずそれを保全・活用する視点があり、その上に新規整備を考える流れである。今の西宮らしさ・魅力を計画の「現況」の中でもっとPRすべきと考えている。【事務局】
 - ⇒ 現状の緑を把握した上で、これらをネットワーク化していくという視点が必要。【委員】
- ・ エリアごとの持っているポテンシャルが違ふと思われ、エリアごとの特色を出していくことがあっても良いのではないか。また、ボランティアとして活動するほど関心も時間も無い層

に向けて、身近な環境に学びの要素を盛り込み、日常の中で気づいてもらうきっかけを作っていくということも重要と考える。【委員】

- ・公園緑地だけではなく、社寺林や農地等のオープンスペースも含めた総合的な評価が必要。それぞれの地区の特色を踏まえた計画について、場所というハードと環境学習のようなソフトがリンクされた計画を策定していくことにより、緑の質が高まると考えられる。【委員】
- ・西宮市の植生は、海岸、市街地、丘陵地、山林等の生育環境により、それぞれ特色がある。エリアごとの特徴を出して、それぞれが「交流する」という考え方を打ち出していくとよい。【委員】

iv その他の意見等について

- ・避難地において、緑化を進める意図は何か。【委員】
 - ⇒緑が防災・減災にどう役立つのかという点について、平常時にも理解されるように、緑化と防災の関連性を上手く紹介していく必要があると考えている。【事務局】
 - ⇒避難地の緑化の意味は、避難者が延焼から守られるということもある。関東大震災の時は公園に逃げ込んだものの火炎で多くの人命が失われたが、阪神・淡路大震災では公園の緑や街路樹が延焼を防止したという教訓があって記載されたものである。【委員】
 - ⇒緑の機能をイメージしながら書き込んでいくことが重要である。第1回の議論でも緑の量ではなく価値に力点を置くといった話があったが、緑が果たす機能はたくさんある。これらを想定し得る書き振りだと、市民にとって納得しやすいものとなる。市民の一般的なイメージは「緑＝自然」といった短絡的なものになりがちなので、緑の機能を感じられるような書き方を意識する必要がある。【委員】

(3) その他（アンケート調査の実施状況について）

- ・年齢層別、エリア別の違いも興味深いですが、一般向けアンケート調査票の特に問18（緑化・緑地保全の活動状況）で、活動度合いの違いによって、問5以下で問うている緑や公園への気持ちに違いがあるのか、についても把握されたい。【委員】
- ・住んでいる住宅がマンションなのか戸建てなのかも把握されたかった。【委員】
- ・子ども向けアンケート調査の実施はどうなっているのか。【委員】
 - ⇒全41校からエリアごとに2校ずつ、代表校を計6校抽出し、小学2年生、5年生を対象として実施する予定。総数としては600件程度を想定している。設問内容としては、緑に関する意識というよりも、子どもの遊びや自然体験について問うものとしている。素案を作成中で今後学校と調整する。【事務局】
 - ⇒子ども向けアンケート調査票については、事前に委員に内容確認を依頼しては。【委員】

以上